

君のおしゃべりは止まない

尾崎愛

僕がポロシャツのふちに青い蝶を飼ったことがあってね

ボタンをはずすのと身じろぎするの　どちらが早いかわきも見ていたんだ

君、肌や勉強机が欠けたことはあるかい

僕はそのとき銀の色を知ったんだ

道をすすめているのか、道がうしろになるのか、分からなくなることはないかい

そんなときには決まって足首が二本の杖にすぎないように思うんだ

頬の温度を正確に推測ったことはあるかい

それはサーモン色のぼらと等しく同じなんだ

真反対の国に管をとおしたことはあるかい

そこには風と砂だけがあるんだ、それとひとつまみの声、塩

それは哀しみの歌だよ　あるいはチーズの一欠片かもしれない

二百年前のあるあたたかな日、

僕は芽吹きたての双葉と目があって、思わずきいてしまった

君はどこにいるの

そしたらあの子は、起きぬけに野暮なときかないでって

顔を背けて、それきり詩になってしまった

右側の羽根だけが小さい湖がいたんだ　それを美しいと言ってこぼしてしま

ったのが僕が一番ひとを傷つけたときだよ

それ以降　ティーの音は失われてしまった　僕のためさ

雨粒になるのは苦しいことみたいだ　あの男が電話中にうろうろ歩き回るのは同じくらいにね　君　コーヒーグラスの中にはすべてがあるよ　特にフレッシュを落としたときにはね　ところで君、退屈ではなさそうだね　ではそろそろ、扉を抜けて昨日に向かうとしようか　そこにはきつと数束の葦と、

金と緑があるだろう 君の目に映るものでは 君が一等美しいだろう 湖の
底にはかの山の怒りが眠るだろう それは僕らの指が届くものではなく、手
首までが埋もれてしまうものだろう

君 顔をうずめないで 僕らの果ては小鳥の爪先にも劣らぬほど美しいのだ
から 光って